

自分を信じて進め、進め



小原玲さんがセルフタイマーでアザラシといっしょに撮影したお気に入りの写真—本人提供



前高では吹奏楽部でチューバを担当したという萩原潤さん

動物写真家の小原玲さん(55、1979年卒)

が授業中、暗室で写真を現像していても、先生は見逃してくれた。「自分で見つけた道なら、信じて進みなさい」。責任のある自由を大切にする学校だった。

引っ込み思案な性格だったが、教室で友だちの写真を撮ることで、みんなと仲良くなれた。一番の思い出の写真は、教室でふさげている友人と、その近くでまじめに授業をしている先生の様子を

写したものだ。この作品が、高校生が写真の腕前を競う「写真甲子園」の前身となるコンテストで、グランプリを受賞した。

茨城大学卒業後、「真実を伝えたい」と報道写真家になった。1985年の日本航空ジャンボ機墜落事故や、89年の中国の学生らによる民主化を求める運動が政府に弾圧された天安門事件の現場などでシャッターを切り続けた。歴史の一場面に立ち会えることの誇らしさ。一方で、人の悲しみを写すことへの罪悪感がつきまとった。

そんな思いを忘れさせてくれた被写体はアザラシだった。撮影が楽しくてしかたがなかった高校時代を思い出した。「理屈はいらない。伝えたいことを伝えよう」。以後、アザラシを撮り続けている。

「自分で考え、自分で責任を取る覚悟があれば、どんな道でも進んでいける」。そう考える自分にしてくれたのは、前

高だ。

オペラ歌手の萩原潤さん(47、1988年卒)は高校時代、音楽の成績はいつもトップクラス。こっそりと楽しんだ。

父親がピアノの調律師、母親が小学校の音楽の先生という音楽一家。4歳でバイオリン、5歳でピアノを始めた。高校生になると、ピアノの先生のすすめで、歌も習い始めた。

東京芸術大学音楽学部音楽科に入学。トップ級だった高校時代とは違い、天才が勢ぞろいしていた。誇りを持ってない毎日。教育実習で訪れた前高で、自信のなさを見抜いた音楽の先生が「もっと自信をつけてから教員になっても遅くはない」と激励してくれた。

力をつけるために大学院に進み、30歳の時にドイツに留学。ドイツの音楽祭のオーディションに合格し、舞台デビューとなった。36歳で帰国。日本の舞台上で「フィガロの結婚」「魔笛」などに出演し、主役級を務めている。お客さんの拍手が力のみなもた。

「もっと自信をつけろ」と言ってくれた前高の先生はすごかった。あの先生に出会えてよかった」